

名護市学習支援教室ぴゅあ  
嘉納顧問提出資料

### 行政と大学の連携事業

## 名護市学習支援教室の活動と今後の展望

—子どもの学力保障と居場所づくりを目指して—

嘉納英明（名護市学習支援教室顧問）

名護市学習支援教室は、不登校の児童生徒や生活保護世帯数の増加等を背景に設立された。同教室は、名護市役所と名桜大学の連携事業であり、中学生への学習支援と居場所づくり（第一教室・ぴゅあ）、小学生の居場所づくり（第二教室・きじむな〜）をメインとした2つの教室の総称である。

### 1. 名護市学習支援教室の活動

#### ①名護市学習支援教室ぴゅあ（第一教室）

- ・2013年（平成25）5月開設
- ・名桜大学内の専用教室にて、主に、教職履修の学生による学習支援、居場所
- ・対象者は、名護市内の生活困窮世帯の中学生
- ・週3回（月、水、金）活動時間は、18:00～20:00
- ・中学生は、送迎バスを利用して大学へ
- ・毎回、20名程の中学生が出席

2016年度（平成28）ぴゅあの実績（3月9日現在）

	回数	参加生徒数	ボランティア学生数
4月	教室開設の準備		
5月	7	101	67
6月	14	200	148
7月	12	132	127
8月	夏休み		
9月			
10月	11	271	103
11月	12	323	108
12月	9	237	87
1月	9	201	79
2月	12	284	87
3月	2	42	9
	88	1,791	815

※ 2016年度（平成27）実績  
→高校受験者数56名、うち推薦合格5名

※ 2015年度（平成27）実績  
→高校受験者数41名、うち合格者37名（高校進学：36名）。ぴゅあに継続的に参加した生徒15名全員合格。



第一教室（ぴゅあ）少人数指導



第一教室（ぴゅあ）少人数指導

②名護市学習支援教室きじむな～（第二教室）

- ・2016年（平成28）6月開設（子どもの居場所学生ボランティアセンター／琉大と連携）
- ・名護市大中区にて教室を設置、主に、教職履修の学生による学習支援、居場所
- ・対象者は、名護市内の小学生
- ・週2回（火、土） 活動時間は、火→17:00～19:00、土→10:00～12:00
- ・小学生は、保護者の送迎、又は徒歩で教室へ
- ・毎回、16名程の小学生が参加

2016年度（平成28）きじむな～の実績（3月9日現在）

	回数	参加児童数	ボランティア学生数
4月	教室開設の準備		
5月			
6月	1	12	4
7月	9	181	42
8月	7	126	34
9月	5	86	22
10月	8	144	26
11月	8	123	35
12月	5	89	19
1月	7	85	32
2月	7	93	25
3月	1	10	3
	58	949	242



第二教室（きじむな～）豆まき



第二教室（きじむな～）工作

2. 支援者（学生）の学びと卒後の動向

- ①年数回、市役所社会福祉課保護係、子ども家庭部との情報交換会を開催し、2016年度は、県内外への視察（東京2回、広島、石垣）を実施した。学生の教育・福祉に関する知見は深まっている。
- ②学生は、小中学生との関わり方、コミュニケーションの取り方を学んでいる。これは、教育実習でも生かされている。また、沖縄の子どもの貧困問題を含む様々な教育事情について実践的に学び、毎年、「卒業論文」のテーマとして取り上げる学生もいる。
- ③学外の助成金を獲得して、毎年、「中学生と大学生の学習旅行（一泊二日）」、スポーツ・レク会等の行事を実施している。これは、学生の企画・実行力を育む機会となっている。
- ④支援活動に関わった学生は、卒業後、臨時的任用教員（沖縄県内の中学校教諭、大分県内の高校教諭）や子どもの居場所学生ボランティアセンターのコーディネータ（沖縄県／琉球大学）に就いている。また、福岡教育大学大学院、愛媛大学大学院、広島大学大学院へ進学したりして、教育・福祉領域の人材として活躍が期待されている。

3. 名護市学習支援教室の運営をめぐる課題と今後の展望

①名護市学習支援教室の運営をめぐる課題

- ・支援教室は名護市等の予算を活用して運営しているが、送迎バス借用費の占める割合が大きい。バスをリースしてその部分の予算を圧縮し、予算を活動費に充てたい。現在、市役所、大学と調整中である。
- ・学生の生活も余裕があるわけではない。夜間のアルバイトは時給が上がるため、やむな

く、自分の生活のため、支援を離れる学生もいる。支援教室の手当を増額する必要がある。第一教室（ぴゅあ）の場合、現在、一日の活動に対して千円の手当である。

- ・第一教室（ぴゅあ）に対して、中学生や保護者からさらに開催回数増の要望がある。これらの要望を受け入れるためには、学生の処遇を含む、支援教室の在り方を議論する必要がある。

## ②今後の展望

- ・現在、支援教室の専任職員は1名であるが、平成29年度から2名体制になる予定である。第一教室（ぴゅあ）と第二教室（きじむな〜）の効率的な運営が期待出来る。また、2017年度予算に食育材料費が計上され小学生に補食（おにぎり）の支給が可能になった。
- ・第一教室（ぴゅあ）卒業後、高校進学を果たしたが、中途退学者もいる。中途退学防止、高校卒業までを支援する態勢を市役所との連携でどのようにするのか、検討を要する。なお、第一教室（ぴゅあ）は、週3回、教室を開いているので、隣接して高校生クラスの設置は可能である（「名桜大学夜間学級「がじゅまる」の構想」を参照）。教育機会確保法（2016年12月）の趣旨を最大限生かすような高校生支援のあり方を検討したい。

<名桜大学夜間学級「がじゅまる」の構想>

嘉納私案

○名桜大学夜間学級「がじゅまる」は、自主的な学級である。入学対象者は、「困窮世帯の高校生で、学びを深めたい者」「義務教育の学び直しをしたい者」、「中学校は卒業したものの、再度学びたい者」、「外国籍で日本語の学習をしたい者」、「戦中戦後の混乱のため、義務教育を終了していない者」等、学びたい者、全ての方に門を開き、義務教育の保障の場としての役割が期待される。夜間学級「がじゅまる」は、名護市を含む北部12市町村の住民を対象としている。年齢不問の自主学校である。特に、高齢者にとっては、学び直しと生きがいがいづくりにつながる。

○名桜大学には、夜間開講されている、名護市学習支援教室ぴゅあがある。同教室と併設して、「がじゅまる」クラスを設置することは、難しいことではない。昼間開講でも可能である。「がじゅまる」は、まず、現役の高校生が通い、徐々に、年齢層を広げる。併設しているぴゅあの中学生とも異年齢交流の機会が期待できる。「がじゅまる」の支援者は、主に教職を履修している真摯な学生や地域の方々である。

高校生等の支援を目的とする「夜間学級」の設立にあたっては、まず、ニーズ調査等から始めなければならない。ただ、高校生の困窮世帯の3割がアルバイトをしている現状から（「琉球新報」2017年3月7日）、「夜間学級」開設後、「夜間学級に通いたい、アルバイトをしなければならない」状況の高校生に対してどのような「夜間学級」経営が望ましいのか、検討を要する。

## ③中卒後の支援、高校進学後の支援—上記②と関わって—

自治体では、高校不合格者や未受験者への支援として、再受験者と就職希望者への対応を行っている。再受験者には、出身中学校から本人への通知と受験手続きをしたり、必要に応じて通信制高校や学習支援塾（無料塾）への案内を行ったりしている。CW（ケースワーカー）が介在している自治体もある。就職希望者に対しては、就労支援員と連携して就労先を決めたり、CWが対応したりしている。しかし、総じて、中卒後の彼らとの連絡が十分出来ず、支援活動も不調になっているケースが多い。

8市会（県内の市の社会福祉課職員等で構成）では、無料塾を経て高校進学を果たした彼らの学修状況や卒業後の進路指導についても検討されているが、追跡調査、対応は十分ではないという。名護市の場合、保護者への状況確認、本人との面談、就学支援を行っている。